国語科学習指導案

指導教官：
実習生：

1　対　象　第１学年４組
2　日　時　2023年６月16日（金）第４時限
3　場　所　1-4
4　単元名　『伊勢物語』「芥川」（言語文化 数研出版）
5　単元について

(1) 単元の目標
・正しく音読し、古語の意味や文法を踏まえた正確な口語訳ができる。
・「男」の行動と心情の推移を読み取り、歌の意味や込められた想いを理解することができる。
・主体的に学習に取り組み、歌物語の内容や和歌の役割について進んで理解することができる。
・他の人と意見を交換し、あらゆる視点から様々な考え方をすることができる。

(2) 教材観
本教材は現存する最古の歌物語である『伊勢物語』の「芥川」という作品で、長年思い焦がれていた女をやっとのことで盗み出して逃げる途中、その女を鬼に食われて失ってしまい悲しみに暮れる男の心情が歌に集約され描かれている。男の行動とその時の心情の推移を読み取ることで、男に感情移入しながら読み進めることができ、古文に親しみをもってもらえることが期待できる。古文に少しずつ慣れてきた高校１年生にとって、作品に描かれる人物の心情をより身近に感じ、物語の展開や和歌の意味を理解した上で、作品全体を読解・鑑賞するために適した教材である。

(3) 生徒観
全日制普通科の１年生である。体育祭が終わり、生徒同士の仲も良く、授業中に発問した際や、ペアワークを行った際は積極的に話す生徒が比較的多いクラスである。高校生になって古典に触れる機会は多くなったが、語句の意味や文法についての知識はまだ十分ではない。特に動詞、助動詞の意味や活用があやふやな生徒が多いため、ややこしい文法の意味や活用を考えさせる際は、積極的にペアワークを取り入れたり、より細かく説明するなどして生徒達が正確に理解できるよう工夫する必要がある。

(4) 指導観
本教材では作品の成立や特徴を理解した上で、本文の読解と文法事項の説明を行う。本文を音読し、読み方を学んでから、本教材の内容理解、重要文法事項、口語訳を整理していく。構成を意識しながら読み進めることで、男の行動や心情の推移、歌の意味を理解させ、読解力を身に付けてさせたい。
現代にも通じるような恋愛を題材にした作品であるため、自分だったらこのときどうするだろうと考えさせながら、男がとった行動や感じた心情を理解してもらいたい。

6　単元の評価規準

A 知識及び技能	B 思考力・判断力・表現力等		C 学びに向かう人間性
・古典を読むために必要な文語や訓読の決まり、古典特有の表現について理解している。 ・これまでに学習した文法及び新たに学んだ文法を正しく理解している。	・現代仮名遣いに直して正しく本文を読むことができる。 ・文章に描かれた人物、情景、心情、和歌に込められた想いを読み取ることができる。	・時代背景や構成から内容を正確に理解することができる。 ・登場人物の行動やその意味について理解することができる。	・授業に積極的に取り組んでいる。 ・積極的に意見交換をし、自分の意見を表現しようとしている。

7　単元の計画（総時間　３時間）

次	学習活動	指導上の留意点	評価規準
一 本時	○『伊勢物語』の文学史について学習する。	○当時の文学の特徴を知ってもらい、そのことを踏まえて本文を読ませる。	・授業に積極的に取り組んでいる。(C)
	○重要文法事項について学習する。	○文法書で確認しながら、新しい用法をしっかり理解させる。	・古典を読むために必要な文語や訓読の決まり、古典特有の表現について理解している。(A)
	○本文音読＆段落分け	○漢字や古語の読み方を正しく学ばせる。	・現代仮名遣いに直して正しく本文を読むことができる。(B)
	○第一段落の本文読解 ・助動詞「けり」「ず」の確認 ・動詞の活用 ・係り結び ・音便 ・副詞の呼応	○これまでに学んだ助動詞「けり」「ず」と、動詞の変格活用、係り結びを中心にしながら、今回初めて学ぶ音便や副詞の呼応についてもしっかり理解してもらえるよう適宜ペアワークを行いながら学んでもらう。	・これまでに学習した文法及び新たに学んだ文法を正しく理解している。(A) ・積極的に意見交換をし、自分の意見を表現しようとしている。(C)
	・口語訳の確認	また、男の行動と心情について正確に読み取らせる。	・登場人物の行動やその意味について理解することが

		○分かっていない生徒がいたら適宜声かけ、机間巡視を行う。	できる。(B)
二	○前回の復習(文法) ○前回の復習(本文) ○第一段落の続き本文読解 ・助動詞「けり」「ず」の確認 ・動詞の活用 ・係り結び ・音便 ・副詞の呼応 ・口語訳の確認 ○「白玉か～」の和歌について考察 ○第一段落まとめ	○前回学んだ重要文法事項について復習する。 ○前回学んだところまでの本文の内容を復習する。 ○これまでに学んだ助動詞「けり」「ず」と、動詞の変格活用、係り結びを中心しながら、今回初めて学ぶ音便や副詞の呼応についてもしっかり理解してもらえるよう適宜ペアワークを行いながら学んでもらう。 また、男の行動と心情について正確に読み取らせる。 ○男が読んだ和歌に込められた意味を考えさせる。 ○第一段落の内容を最後に復習	・これまでに学習した文法及び新たに学んだ文法を正しく理解している。(A) ・授業に積極的に取り組んでいる。(C) ・これまでに学習した文法及び新たに学んだ文法を正しく理解している。(A) ・積極的に意見交換をし、自分の意見を表現しようとしている。(C) ・登場人物の行動やその意味について理解することができる。(B) ・文章に描かれた人物、情景、心情、和歌に込められた想いを読み取ることができる。(B) ・時代背景や構成から内容を正確に理解することができる。(B)
三	○前回の復習(第一段落) ○第二段落音読 ○第二段落の本文読解 ・助動詞「けり」の確認 ・動詞の活用 ・音便 ○学習内容のまとめ ○物語についての発問(2問) ①男が「かれは何ぞ。」という女の問いに対して何も答えなかった理由は？ ②女の人物像は？ 個人ワーク ↓ ペアワーク	○前回までの物語の流れを確認する。 ○全員で音読をし、読み方の確認と内容理解をしてもらう。 ○これまでに学んだ「けり」や動詞の活用を確認しながら、今回新しく学ぶ音便についても理解させる。 ○この物語がどのような内容で、どのようなことを伝えたかったのかということをまとめる。 ○物語を正しく理解した上で答えることができる発展的な問題を2問出し、内容を深く理解出来ているか確認する。 最初は個人で考えてもらい、その後ペアで確認し合う。 他の人がどのような考え方を持っているか、自分の考えとはどのようなところが似ていて、どのようなところが違ったか、様々な角度から考えることができるということを分かってもらう。 ○ワーク中は机間巡視を行い、生徒の意見を引き出す。	・授業に積極的に取り組んでいる。(C) ・時代背景や構成から内容を正確に理解することができる。(B) ・これまでに学習した文法及び新たに学んだ文法を正しく理解している。(A) ・登場人物の行動やその意味について理解することができる。(B) ・文章に描かれた人物、情景、心情、和歌に込められた想いを読み取ることができる。(B) ・積極的に意見交換をし、自分の意見を表現しようとしている。(C)

8　本事案（第一次）

(1) 本時の目標

・これまでに学んだ文法事項、新たに学ぶ文法事項をしっかりと理解する。
・男の行動と心情の推移を正しく読み取る。
・正しく現代語訳ができる。

(2) 本時の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入 １５分	○今日取り扱うのは『伊勢物語』の「芥川」ということを伝える。 ○『伊勢物語』の文学史について学習する。 ○重要文法事項について学習する。 ・副詞の呼応 ・音便（ウ音便）	○本文中に和歌や新しい文法が出てくることを知っておいてもらう。 ○当時の文学の特徴を知ってもらい、そのことを踏まえてから本文に入る。 ○文法書で確認しながら、新しい用法をしっかり理解させる。	・授業に積極的に取り組んでいる。(C) ・古典を読むために必要な文語や訓読の決まり、古典特有の表現について理解している。(A)
展開 ３２分	○本文音読＆段落分け ・最初は教員が読む。 （読み方を確認させ、段落分けをする。） ・ペアで一文ずつ読み合いをする。（交代） ・全員で音読 ○第一段落の本文読解 ・助動詞「けり」「ず」の確認 ・動詞の活用 ・係り結び ・音便 ・副詞の呼応 ・単語の意味 ・口語訳の確認 ★文法事項や口語訳の重要なポイントは生徒を当てて生徒に答えさせる。	○漢字や古語の読み方を正しく学ばせる。 ○間違えやすい読み方の単語は特に注意。 ○どこで話が切り替わるのかを理解させる。 ○これまでに学んだ助動詞「けり」「ず」と、動詞の変格活用、係り結びを中心しながら、今回初めて学ぶ音便や副詞の呼応についてもしっかり理解してもらえるよう適宜ペアワークを行いながら学んでもらう。 また、男の行動と心情について正確に読み取らせる。 ○分かっていない生徒がいたら適宜声かけ、机間巡視を行う。	・現代仮名遣いに直して正しく本文を読むことができる。(B) ・授業に積極的に取り組んでいる。(C) ・これまでに学習した文法及び新たに学んだ文法を正しく理解している。(A) ・積極的に意見交換をし、自分の意見を表現しようとしている。(C)
まとめ ３分	○今日の授業の内容のまとめ ・物語のストーリーや、重要文法を振り返る。 ○次回の予告	○教科書やノートを見ながら今日の学習内容を軽く復習する。 ○次回は続きの本文から学習することを伝え、復習、予習を促す。	・授業に積極的に取り組んでいる。(C)

9　準備物等

・教科書
・ノート
・文法書

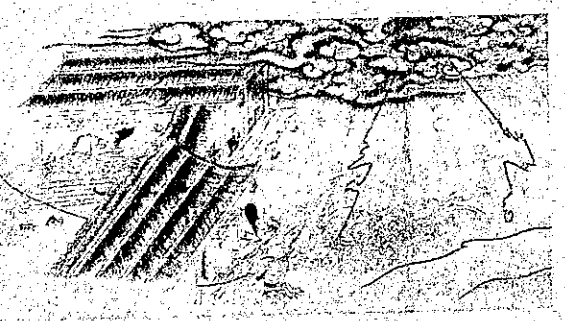
伊勢物語

芥川

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗み出でて、いと暗きに来けり。①芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行く先多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・②胡籙を負ひて戸口に居り。はや夜も明けなむと思ひつつ居たりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けども かひなし。

③白玉か何ぞと人の問ひしとき
露と答へて消えなましものを

これは、④二条の后の、⑤いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにて居たまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御兄人堀河の大臣、⑦太郎国経



伊勢物語絵巻（模本）　鎌倉時代の絵巻を江戸時代に摸写したものとされる。

1 「女のえ得まじかりける」とは、どういうことか。

2 ①芥川　京都市中の川か。今の大阪府高槻市を流れる芥川、あるいは架空の川とする説もある。

この発言から「女」はどのような人物だと思われるか。

3 「男」が武装して戸口にいたのはなぜか。

②胡籙　矢を入れて持ち運ぶ道具。背中に負う。

③白玉　真珠。

④二条の后　藤原長良の娘、高子。清和天皇の女御。

⑤いとこの女御　藤原良房（長良の弟）の娘、明子。文徳天皇の女御。

⑥堀河の大臣　藤原基経。長良の三男で良房の養子となる。太政大臣。京の堀河に邸宅があったため「堀河の大臣」と呼ばれた。

⑦太郎国経の大納言　藤原国経。長良の長男。

＊え…（打消）　よばふ　わたる　いと　率る　さへ　いみじ　いたし　やうやう　かひなし　ものを　仕うまつる　たまふ　かたち　めでたし　おはす

の大納言、まだ下臈にて内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめて取り返したまうてけり。それを、かく鬼とは言ふなりけり。まだいと若うて、后のもとにおはしけるときとや。⑧

（第六段）

⑧ただに　特別な身分でないさま。入内する前の身分のこと。

絵巻の中で、本文の描写と異なる描かれ方をしている場面はどこか。

＊下臈　内裏　参る　かく

学習

1 第一段落について、物語の展開に即して「男」の行動と心情を整理してみよう。

2 「白玉か……」（冥・9）の歌について、助動詞・助詞に注意して現代語訳してみよう。また、歌に込められた「男」の心情を説明してみよう。

3 第二段落で語られている事の顛末を説明してみよう。

言語活動

1 第二段落は後人の付け加えた注記だと言われている。以下の観点から、第二段落について話し合ってみよう。

(1) 第二段落は第一段落に対してどのような関係にあるか。

(2) 第二段落があることで章段全体の読みはどう変わるか。

ことばと表現

1 傍線部の助詞について、種類と働きを説明してみよう。

(1) 女のえ得まじかりけるを、（冥・1）

(2) 「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。（冥・5）

(3) 鬼ある所とも知らで、（冥・7）

(4) 神さへいといみじう鳴り、（冥・8）

(5) はや夜も明けなむと思ひつつ（冥・2）

作品解説

「みやび」な「男」の一代記　伊勢物語

『伊勢物語』には、さまざまな恋の形が描かれている。恋愛の情趣を理解する主人公の「男」は、在原業平のイメージと重なり合い、理想的な平安の男性像を形作った。

写本の初段

成立　『古今和歌集』（冥・左頁）に収録された在原業平（冥・左頁）の和歌や詞書と深いつながりがあり、物語の核となる部分は、延喜五（九〇五）年以前には成立していたとされる。その後、十世紀を通して増補され、十一世紀初めまでには、現在のような形になったと考えられている。

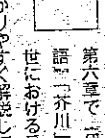
作者　未詳。複数の作者が関わっているとも言われる。

内容　約百二十五段（伝本によって異なる）からなる歌物語。各章段は、和歌を中心に、その歌が詠まれた事情を語る短編物語となっており、「昔、男」で始まることが多い。この「男」は、読者に在原業平をイメージさせるが、実際の業平とは異なる虚構の部分も多い。

現存する本は、「男」の初冠（元服）から死までの一代記的な体裁をとっており、さまざまな女性との恋愛模様を中心に、親子の情愛、主従の絆、友人とのやり取りなどがつづられる。簡潔ながら叙情性豊かな和文で、平安貴族らしい「みやび」な「男」の振る舞いを描き出している。なお、業平が在原氏の五男であったことから、『在五が物語』『在五中将の日記』と呼ばれることもあった。

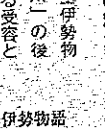
評価　古典中の古典として、『源氏物語』をはじめとする後続の文学や芸術に多大な影響を与えた（冥・右頁「ズームアップ」）。特に平安時代末期からは、失われつつある王朝時代の姿を伝える規範として、『源氏物語』とともに強く意識され、中世以降の文芸を生み出す源泉となった。

関連書籍



俳句万智『恋する伊勢物語』

『伊勢物語』の恋に焦点をあてた親しみやすいエッセイ集。作者自身の体験や恋愛観を交えながら、古典そのものを楽しむ読み方を教えてくれる。



鈴木健一『知ってる古文の知らない魅力』

第六章で『伊勢物語』「芥川」の後世における受容と展開をわかりやすく解説している。そのほかの有名古典作品についても、興味深い知見が満載。